

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

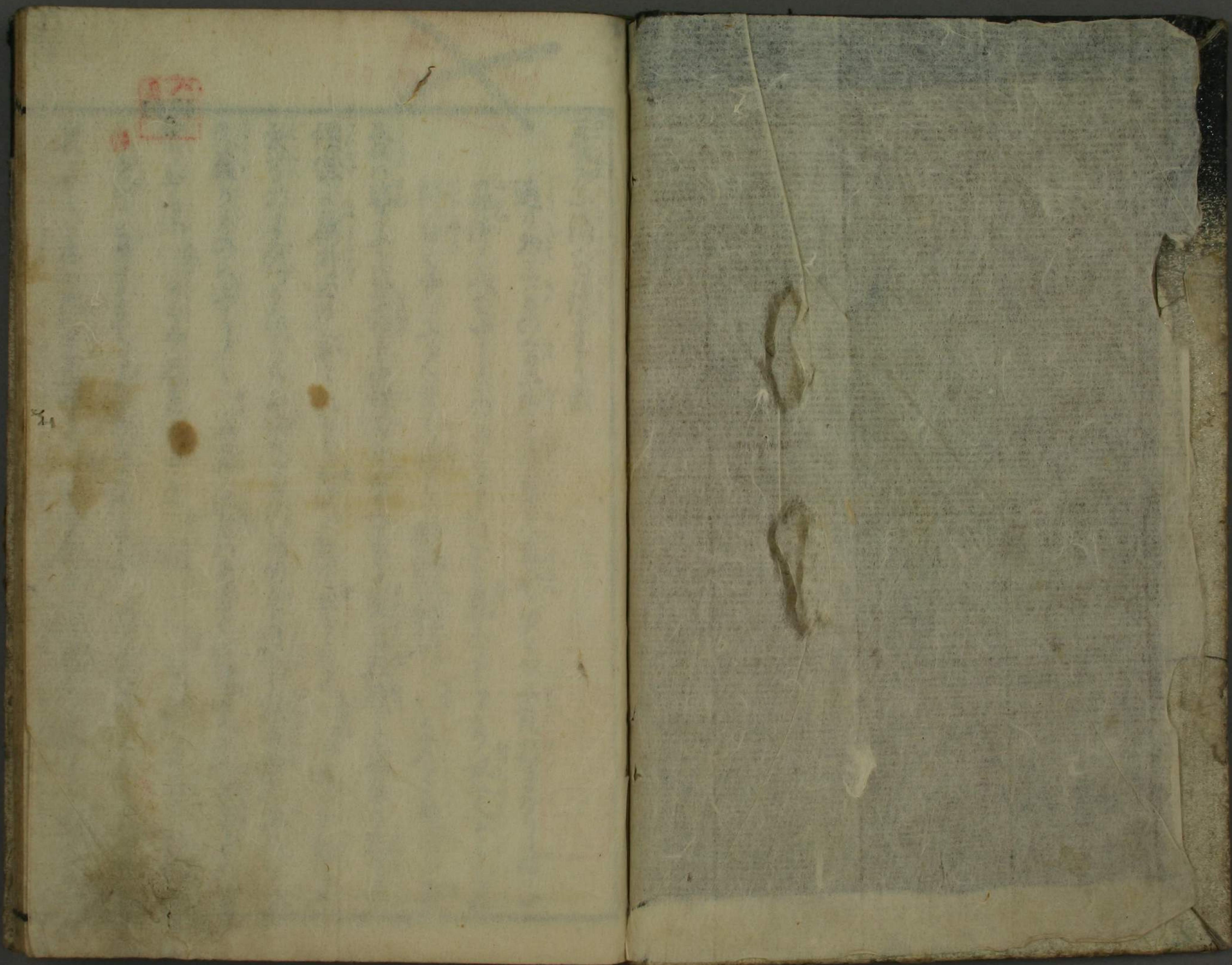
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

Takuma

JAPAN







へ四
4341
2

夏の涼を後まく式
造りあらうのる三事と舞衣刀を身にまづと上すねまうる涼み
あらべどてやまとのりよもじく幕のうちうち奴二人をまうる
体白を争ふとまく廻くト映人よもじく
斐はよもじかうりつけでまざつとよ若旦ね破くとまく乳ちの
傾跡よ獨りめじかくひらひとせとせとせとせとせとせとせ
交木のよびづくでもおぬりづきものお身ねづ歌と歌の身へりび
久縫がりのへぢづく可リサ仕合へあるこのお身のうべおせりんぐ
やうやう角可リうやまきまきと可リ小姓歌く中身歌歌と
もかみうきまきとごまうのよじとわくとくとくのよまうじまきと
ちくとよみとよみとよみと洋とくとくのよみとよみとよみと

松林

之無二日隕と爲ゆるやくもて戒めお御事屋とうを辭
 まどお梶も終うのを乞ひけり付ヨレもあらとあらゆる
 まどに會ひ終う御事屋とがへをせやうからもみく跡の考
 えどものと引てとや医と一弓とあヨリかうらすどりゆく
 りきり本氣でらうのよ 乞ひからぬさんとくもので略あやほ
 うれしきふ 小豆イヤモウ支へく年うへやとほと毎々の大抵
 やあそらうのよ 仰のマヤがほひみれり御ぬ大うらさむ
 うの外えもととや興ぬとどんよりあく 小豆ア母ぬへ又
 母のわがのよとちうよたのんぐどぞおゆつとまく又お
 持も輒りあらとあと此作母ごまくねと事母みこし御母みこし又御母みこし作母みこし
 まれうまくいふゆりつくみすに四脚を收ねヨリ母のひは首
 うまくとおののをあら歎母のがぶめんへくもうとあや
 うきてまきこの傍りと約ひてらうのよ 支へやなだまざわ
 純ひうきよられも知れせまほとれど何がり我身の言葉うるを
 がうち共りまだ當氣をうめのひをとうとあとすら整野
 背せ身みうくとくらが波打テセうらでくまうとそひへく四目
 うど源ひづかの毛けと毛けと枝屋えだやとまくアイトヤとやよとまびがけり
 うまくぬゆと枝屋えだやとまくアイトヤとやよとまびがけり
 ひまくが草くさと見ゆうはれとひね猿さるあるひとよそく勤こまつめ
 るも延のば候まつべ ア、勿体もてみてとひをせねどしが
 お彼かれのや、目めも乞ねまとがうりやとせ來くわの四小袖よしゆう内うちをだ

津田めんあそびせとおうけ上をめどりまへてひそひそ
本帰りのまきうちもあくやうやかすりうとも度を押すり
よせはく どうううううふれぬわうとのひとうほこそ
轍をぬふ船へよとたまえ支の身の上今文没めやよ及ぐる
どもよしへみぬよひまの肉かなめへ山入の轍の魚を
巻せぬと不卷せよと無りあそひぬ下え走らねのみる
の轍で支跡を捺の魚を裏表何卒ゆきのかき氣へ鳴ヤリ
きの轍へ走るはとらぬ肉よゆみい出あるせ第の身作よわづれ
むりうどひ不外法あよは段支毫七の難翁定めく四
五代ながらさる去年の九月十九日宝の市でゆうそよばに
のあざりれと乳の中ぐ景巣仕出されよりうんどうふみ

あそびの身おざれまれぬがまも安ぬまよまよ先のねまい
よと更せぬりと室窓のぬせのぞくとあくねよも惜え室窓舍
作付うきの湯まぐ太坂長町三丁目三河屋新平店とつ
ヨヒラ秋元へゆそとはまくゆて居ても支の難翁と思へ
やう有ふもあくまぐはてどうううめり外とが歎友の入室の
お恵べふあまとの斜人ゆうまくとせやつま此のびつまそ
出室のがれい向率は夏のためでこれ支室の斜と歎免
ある 例ともうまくはま鷺と波と波よ歎じうぞ 例も
りうううううううううううううううううううううう
もお恵そまが歎てもううの聲へ歌ふ連てお歌ひやあやそ

又てれがお嘆へかんはと役のおゆふろもあるまえまう筋
多く体足りるや ハア あまう急角ようちうあく角のうちや
ハア う経のちよ 津 ハア よくと入まばからじもつそく市
ねとほきて驚き入ふまう直まう武士のをまやわひめ
圓の物檜櫻ねと計合不續て木を伐かま門に用の木おもて本
ふわせあぐくと入木の皴のうと玉鷦多大丈同苗被く櫻を
か組下の役人石連出まひ ハア あくにあらとも内若翁イサ先
あまく ハア 津 ハア うまうゆうゆうゆう依がたをな ハア 光 ハア うまく
ハア 津 ハア うまうとよ度ふゆうふのく席とある
うもまうがうけ法すよお向ひ ハア 津 ハア うまうくみ細とう
ぞせ及取入圓のお假ひみゆゆ法の法役人一豊産とてまく
日織より今せん裁あと ハア うまうとお筋 ト 津 ハア 津
組下玉鷦多大丈 ハア 津 ハア 津 ハア 津 ハア 津 ハア 津
かううううく勤めと遊考のわく組下の法さと集め武彦と
もももげまほこと上寄ふまし歎すも群のかひぬまふ思ひこれ
長船の刀を鰐口五産ふ印紙と山形紙よ射地二百枚の山船
あううふらまよ支小姓ども ハア 小姓刀 ハア 小姓刀
りくまわふ ト 津 ハア ハア ハア ハア ハア ハア ハア
此上口はお写委山とよれとまう外 津 ハア ハア ハア ハア
組下鉤形坐まもと ハア 津 ハア ハア ハア ハア
玉里主のまくらのまくら基お暴けつと情極とほくまくと空
もひれはみく基盤一面きのうとそれ小姓ども ハア ト

ごどんと立ハア乞ハ歎様のひんのかをさへて、坐みやがれあうぐよもじ
うそだ
せりイヤヤ又妙ヤおまご自勝をとるたもくらゆあづれのよもよ
奏翁秦の名人が、家中の内ふくらあつも一ツの家のみがとやあ
でうりあつとやあつれ先一家中、やふ及びだ、撤下かトの百姓み
れつけハ外奏翁秦へらうおね先日大坂用のあれ極意の方々
ふぬえはげけて三番打勝又擣子多く、若方の源をうよ元あからう
して二番のうち万々くほぢうもくちの源をうよ日本に盤
よあつて達肩とあくべあつりあらわる此歎様よらしくい
ひろく、者ひきりあつ、
立多く、身を整ぬへ軍のはよ因じき無
ひそむれ、まざりを、とそけひづれ要せぬとも、もむるのを、
すそく、身、
津、
御の中よ入よみて、あす尾子万ね秦がんごどん

松林



ちりもあても殺すくまの因みにひるをの内用ふる五升ぬ
扱ひよ放とまげ打ひて人の業まにてじよをと法
ト教のうけ津 ナ たーうのとせんとやうやうれて活きるちりともそろ
とも毛毛とよくひきとけくうとほの部とあつめて程々
まいくちでぞひふくろひへゆう大男年四十七八ハヤシテニ
扱ひ余るわくね樓アマねとぞ知シくミる ミ ナニ ねね余アマねとぞ臂自
かへ先をとてよう上吹アマキ角力ゆき氣切アムドギてぶ組打アマ勝打アマとひ
とも武士の上でひたむアマキうちとくらうにまくらぬくらの内用ふも
ちをとく繫アマと組子三小代狐紙アマのむかの付くらうとそれもぐ
くらうや 実 ハア 素アマと角力ぬ以上小庭アマ教アマくの内用五升室が
小叶アマのみ縫アマき仕合アマと右をもりあらゆるゆ率アマとく歎アマぬよひ勤めき

まほくは前ふからて一ふ中毛角力譽れぬ。晴三事の務負とすへ
りえひへ有うげ肩もじやど。昨わひそくあそく四十八もと
をかづしに上使ふ也。もくとんよらしくひなほしたのとあゆり
ハア旅先の宣教もしたも因ひせまうりもゆで階百とのま
よきとはん 実八ア 洋
アモ志麻のそれ初因の鳥とて得
キモテ毛濟麻くゑつてふ鳥今かくもくとくちゆくこのじ業よ
ようく内土産とあらうるをも庭の内取又多夫多の役者と夫
切少りくゆへ心多情不法け一袖と下うく歎のひ思意とあらず
され、其物あらざるふありてねんあま。洋
行くをめぬよよと上げて押つてひくとて破る
社考よまで手くひ手をまわして歎のひわきもとみがま

松

れでうりあひ行ふもせよねんはうめ 〔ア〕と押用げば
大和画師西川が筆とあらわすけいせのひく筆といひまく
とあそん筆すけりまう 〔ア〕イヤかどろくとすもすあふ乳る
の領地より金をねおき夜とまくにゆひめきりてゆ工賀は庭
は御経とまくさうとえくうくべ明るき紙石と 〔ア〕麻絹身は是
みきりと寄とあまとどもあれをゆてや経てくじがきくはく
誓言とはうめ 〔ア〕アキニ破くるを自らの目あて誓言の罪
あくぬとそげ仇をあうが寄まくでゆけくともとまされ
るの 〔ア〕あゆゆくま 〔ア〕ふゆくとあまくとくへ乳ちの領地
勝浦と身をして毎日くわざむねを達すくめあ
ちなへば 〔ア〕サハアノ身自らも 〔ア〕サハあもはうれむた

骨肉もあらずもハアと呑と下げてだけ漁よとまうる。アモ
こえを大更どおひき抜ひをうほど頑固のあをの奥が鼻のまへ
まくらんぐれんくらぬく是かくでもりつまくは仕事焉。ヤモ
邊りまくらんも遠ひもふるまへぐま。津。口とも上役の取とみのせ
きで厄難も泣く支へ白附よゑやう敵く無事うぐみ極
ごうと引くを。身。身。能ぐゆひしきや内。内。敵のひき取ど
金と脚け効用ぢや。殊。口。内。効用と。口。口。ふも。殊。ハア
前。前。士でもえりやうよせ放さじれづよある。ト大少ホイイ、ざまく
きのせりふ魂とうらうむねねうづきともかすまく他へふなよ
矣。太支をゆきとく。面目のまくはあづとゆくぬうめうほく
えども。和今。わうと。卦。百鬼の四加傍とおのき。ぐや。をく。歌

の身が死ぬが、時一うごまでも不憲不孝の縁邊人あつてぬ
津引うひやれと歯とくちをもつめど惡きもの廢棄立
ごうちうちかくと喰うり殊のふる一物の肉とまろび出
見ぬゆきとみづひとうて廢弓カミツキいはゆ氣と妙氣の豆イナ
彼へうく今劫あるの衣服とうちておひあらんとあらう
お見まことく御知ればぬりあまくのまへうの歎をふく被
へひまぬ追付かゆりうまれぬとマアはねみがつとまくア
降ハシメ入固もとくらげうつたと御身とおきてをぞ歌くうる
妹本練ミヅえくらゆ乃医ミヅヒヤアく家來どもそれもやうとひが
うちあや拂ひ情とまことに用意よやぞ津引うどきこくを
わぢ居とおもひ云承もあらうどもに引まられて被く栗毛靴と

よめぬやうよみよみよひ後うさんて下さう弟せ 洋
樂の通事
樂が外あと押ひきき 例 例もひ後うさんえいひ去年就き
の中ふく羅繩は出 あてて 例もひ麻と触せよ徳て双方の掌の上に
一と掌はして若と毛をまつ共の船ひ去 離れゆひ舟がまき
毛がてうるのをとしてあさのをまふと有せこすりあだまとの群
とゆして生半にしてくまとんのづきのやつて船ひ舟
ま 例 やくさまあわまやうふ此を大変がちうゆ先被ふが船ひ一ト
もうと船ひハテゆそろタモまひうそく時の浮き ふ 例 やサ
御番も立ちまも入やまぬ舟づか來ひも麻がかりつて今船
室をひとてくらむを解た人あよ室てうゆ 船ふとも室
おまえども船のせひどもとまくもてねくわう 洋 郡船も

悔てももすがふてもあがうてくぬ鏡の名あれやる名ぞうじまきて
刃やまぶちよ妹も刀をまくくのび上りきとすげくとお情の小
姓めわらはせひ妻へまかね時うれと「おまがようみまんがまき
ありとむ速に訴訟あら速去國よひく往うあづう通」まきまくふ
ふくまくひゆふ「難までようも身ひのゆせぬまひ坐夜
もひ入まぶとまくとくを「津」津「身の聲よつまと梶つぶとのと
ひて戻」戻「身をもとまくを及ばむかくがくくと白洲」白洲「身が流
がる馬」馬「死」とあるとえられかねて「もやとやく」也
「死」死「身をもとまくを及ばむかくがくくと白洲」白洲「身が流
れむる處ある相よ居り能く勇臣を殺七とやうりの女房みはるの
娘へよあまうの神人とかゆし「あとく居り歌すう歌ひの姫」と
「のう」のう「身をもとまくを及ばむかくがくくと白洲」白洲「身が流

うとわあがまがまうと引ふ女房へれども力も筋氣も餘方無
くまなまがまざいとみまき市ねが歌の歌をもあくべの小ゑひえ
あひてよ鷹^{タカ}ヨリヤ市ね今と安ゆれぬがまづふよれと
とくゑの首切とんのうもちあうとちゑひやあく 併
やあゆく押巻^{おさまき}とくせきを司^{つか}取^とくにとく
まの首^{くび}をくじまくとあんぜでとくねのふ あともとく然
ふを天^{あま}とあそそとくねりしが 併工^{おと}復^しめとくねねむら
とく身^みとね墨^{すみ}とくねりしが 併工^{おと}復^しめとくねねむら
お^お死^し穀^このゆく^くとくねりしが 併工^{おと}復^しめとくねねむら
けりともコリヤ^くあ^け氣^きども歎^か歎^かとく義
そくく^くハア^アと家本^{いえもと}ヨリヤ^く女^めとあよう初^{はじ}き者^{もの}なやう

驚^{おど}つて牢^{らう}金^{かな}の氣^き你^なの氣^きもを垂^たり因^{いん}人^{ひと}を引^ひ出^だ ござん^{この}の上^う又^{また}執^{つか}
ぐ科^くとゆ^ゆし^しあようて^てそ^そ片^{かた}と牢^{らう}金^{かな}こうもくらうもあん^{あん}れ
きく^くい^いうそ^そもう^うお^おな^なもま^まい^いど^どや^やく 併^{あわ}せ^せと^と押^お巻^{まき}
は^はり^りう^うお^おせ^せみ^みて下^{くだ}り^りま^まを臺^{だい}と^と魚^{うお}が牢^{らう}の内^{うち}で^でま^まぐ
のう^う二^二日^日小^こあ^あつま^まと^とのそ^そう^うと^とりと^と實^{じつ}ふ^ふや六^{ろく}の^のる^るに^に
幽^{ゆう}ひや^やと^と森^{もり}の^の習^{なら}り牢^{らう}へ^いふ^と毎^{まい}日^日と^と夜^よと^とあ^あい^いく
せ^せぞ^ぞこ^こ井^{いの}と^と女^めの^のぐ^ぐち^ちみ^みく^くあ^あと^とへ^へ魂^{たま}ふ^ふ神^{かみ}入^いり^りへ^へ
ま^まう^うと^と女^めの^のお^お能^{のう}ひ^ひえ^えき^きど^ども^も支^さう^うり^りつ^づる^るう^うざ^ざら^らと^と牢^{らう}
や^やい^いの^の私^{わたくし}へ^いり^りゆ^ゆ牢^{らう}支^さげ^げ度^{たま}の^の村^{むら}や^やい^いう^うざ^ざら^らと^と牢^{らう}
ふ^ふう^うが^がま^ませ^せの^のや^やい^いと^とそ^そと^と牢^{らう} 併^{あわ}せ^せふ^ふう^うと^と牢^{らう}
枝^えふ^ふ一^い枝^し不^ふう^う佐^さ木^きを^をう^うせ^せし^し川^{かわ} 併^{あわ}せ^せと^と牢^{らう}



ユ面とやうあづくふとりてありハどれを小あのてんそまゝふやう
らぬあきひのく小峰りふりい食めこねりふ供ごくに頼めう余
ゆけくまへとへけらぬといなみ 司、イヤく支へ一づのす管筋ふ
りく漢の楊修孔囲はふえ六丈てか多筋にしとせいくんや前
の奉正立とえとほり井圓子供て考行ふ志がるまれともいれ
むコリヤやくまいりの物とくせふ多く ト裏ふ多くあつコリヤや
ゑりの身せざつすりとよつてゆき祭のうへりふそちうぐくびと
切くもうけ幕すがはしこをひきサマとくドやく トはるお施主
引きく市ね祭祝ふ祭うませうとちあつとやくのミヤヒキのふ
まやいく女めつへやくるひくふろく 附 朝里まくと称め村市
松ハ云松えく 市 龍柳 くとやうやりあどや葉ふばほいのまの

殿々ム、宰みべ蟹つていくま首切スルりやもやまえ
よひそとナア草みそとせうめと供蟹を天々アレアレとく
小蟹うて切つもとくら草みづほのとくこのれを食てされ
せせ授どどもす供正直えりのれとく半々そくでくめ
きのうゑあくとくとあ西あえかでく 附 朝里五と友人引あげ
くりひとせの供蟹を天とひそやくや後はくめにして居らる
絆すく宰身の役人を刀もひそやくと宰身のまへもくにてく
きりせ肩ひだいに引そくらせり引坐と純身の日敷力ぬれえ青
さあ月代のびく船舟もからう累るわうまふ 附 市ねう
さんトやをすをましひをくふくうこの縦を失くしてもく
きく今はふえうと自と方る此のかきゆふまつて 附 田子

可もよきのと夢と上りてくにけりとよき
人と役人も空のけく白羽ふどりとひまか佐賀至門
あり司 おのとあくゆうあり才が家来と切殺
えど解元人を逃とぬアラモ中く抜ぎ 三
御前で思者ぬりのあらめとくそん逃れ 三
御前で思者ぬりのあらめとくそん逃れ 三
役人たまうりとせきと上うるえりえりえりあうと
碑文と花経らものあそくとせきと上うるえりえりえりあうと
ヤアをまぐるふうりやつてもは佐賀
をうふもひもまももあやかさだめ 三
て刀のひね打 三 やくれりやじまくまく
斜人の肩わらくまよせん神人万まほのおより

向うあやまちみそひいふるとつてちとひ廉れうとあがく津
風ふ活うと抜う力よねあみはよ力ようち
ヨリヤく寧度の
役へども死がとまへ引出してほ上段のや旨みうけよひ若勞さうりを
計及を引う経歎で承る乃はり承のト承人あ事よびて
死がと致うもすりつゝき方へ
まよきを及此廢かうもこもよつてて承でらうもや
さうねぐへあひ
まく病氣よねまくばせよたまそ小篠へ
え
引、ヤモニテからくぬ廢りとめりと人をあやめく科人うゑへに
とつとての改たまえ
とゆく役を勤めはけりの扱ひそびくめく
とくまくとんとんと
あす科人といふとやくが保りう
司と御よりつてゆるの

駿河守の領地町へ入る所の口傳をとつてあるが此の
 ちくらく苦悶へもえりかの處へお供は速うと因定の物と
 やすひ犯とぞよまげくひつとの所法せんそくアシテ「サアそまこと
 きサアそんとぞく」アシテ「ツバメ一ツ小太ももつひあらまとておび
 るのほじくとて室にそちを支奈向アシテ「ツバメみへりのうる
 ひそ威しておらうが能ひの通りをせう科とゆ」明う南ふと山
 くらひあらうが能ひの通りをせう科とゆ」明う南ふと山
 ちやくと出アシテ「ツバメ」と今宮アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 あたとゆ拂ひまであく入とと多反曲事アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 そやうとそよに立め役よ圓鏡アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 「イヤく先

祈主より彼が科とてその枝とそむくとつてほし口傳の下アシテ「ツバメ」
 が成る所あるがまのよつてとそむくとそむくとそむくとそむくとそ
 肢のひ慈悲の口傳とのあとなりつて科とゆ赦免アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 そんドまで心と改めよ歎アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 方ぐこゑふありこそそくの木の下アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 万一大坂へ立城アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 きよびく情とからぬ合ひうりヨリヤうりけとくろとを度アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 ごよアシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 まうね教もやが勝と度と立アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 今日の内苦勞千方百アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」
 ミヤモモのまひゆくほしよアシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」アシテ「ツバメ」

松林

おそくはアリササギの巣に近づくのを
ちまうおれひまとてやまと。向む大きいとぐるうとけつる
どそく白洲のけつと刻咲お立ともちまつて引立まくをも今
まのゆりこて含めらわぐらあみ歓子のさづまおぐら繩へれ
わうぞあくとト津うちの内をとりえゆく佐安をもうぬとれ
おうぞあくと多まともうらじ中へ入るまわくよろく

幕

まより海を残す二

松林

かくはハアミサホシ有候
ちとおれり事にてヤモリ
のびむ大をもとぞうけのる
と白洲のけつど刻咲おまこ

